

ライリア ニール サフィトリ

インドネシア出身

東京外国語大学 総合国際学研究科国際日本専攻 修士課程

変化について

私は「変化」を憎む人間ではないと普段から思っている。どちらかというとその真逆で、かなり飽きっぽい性格で、既に変化を求める自分が客観的にみられる。もちろん、時に変化に対してちょっぴり寂しい気持ちもないとは言えない。ただ一定な状況で立ち止まることは自分の中の不安を煽り、焦りを招くこともあるので、「変化」を悲観的に思ったことは少なかった気がする。

この3か月で、様々な変化が周囲に起こり、起こりすぎたせいか、3か月のはずだった時間感覚が3年のように感じてしまう。

3月、帰国から日本に戻った後に、人がいない空港が私を迎えてくれた。普段深夜でも人が多い羽田空港は静寂につつまれ、いつもは電車の始発を待つ場所すらとれないのに、今回はソファ席が確保出来たぐらい客がいなかった光景がとても異常だった。その時の自分が空港のエレベーターを使いながら思った、これは大変な「変化」の始まりだったと。

帰国して一週間後にアルバイト先のリーダーからメッセージが来た。3月下旬、いつもは観光客で行列だったバイト先のお店に客が来なくなったからアルバイトを一時停止するこ

とになるという連絡にとっても驚いた。アルバイトがなければ、生活が成り立たないのではないかという恐怖を感じたこともはっきり覚えている。

4月上旬になり、またもや「変化」が一つずつ、毎日のように訪れる。4月1日から始まるはずだった大学新学期が延期になり、一時混乱な状況になった。緊急事態宣言の発表前に、キャンパスが閉鎖された。図書館も入れない状態で、学校は本当に必要な時だけに、書類をサインしてから入るというお知らせが流れていた。さらに、完全オンライン授業がその後決定され、春学期は家で授業を履修することになった。

そんな中、私は日本のニュースを見るたびに不安が増して、結局携帯とテレビを見る時間を減らしていた。家を出るたびにマスクし、うがいや手洗いなど、健康に過敏になってしまったのは私だけではないだろう。そして毎日、朝10時と午後16:30時に必ず市のスピーカーからの外出自粛のよびかけが流れ、それを聞くことが新しい習慣になっている。

そんな「変化」に振り回されながら、私は生活を維持することが一番に目標をつけた。普段大学やアルバイトなどで家にいる時間がとても少なかった私は、毎日家にいるようになったことが、最初は不思議で仕方がなかった。今は家にいて、小さなものごとに感謝を覚えること

が大きな課題となる。家事や料理をちょっとずつ楽しんで、積読した本をちょっとずつ読みながら、修士論文の研究をちょっとずつ進めている。最初は不安で背一杯だった日々が普段の日常に変わり、その不安とあっという間に仲良くなろうと思うようになった。

「いつかこの状態が終われば」とか「終息すれば」とか、もちろん最初は誰でも思い描いているのだろう。しかし、今の私はもうこんな「たれば」の話をやめることを決意した。この「変化」は新しい日常として考えようと思うようになった。そうすれば、自分の気持ちもちょっとでも楽になるのではないかと思うからだ。

もちろん、いつかこの状況が元どおりに戻って欲しいと思っている。この変化で苦しむ人たち、困っている人たちもたくさんいるわけで、いち早く状態が回復することも毎日空かさず祈っている。しかし、自分にとって今をきちんと向き合うことが未来に繋がるのではないかと強く信じている。だから、今日も私は家にいる。



出典：<https://news.yahoo.co.jp/byline/toriumikotaro/20200410-00172342>